

『あやかし艶譚』

著：辻内弥里

ill：minato.Bob

病院中の灯りが消え、大半が寝静まった深夜。

仰向けでベッドに身を横たえながら、真紘はまんじりともせず暗い天井を睨みつけていた。

(.....おかしい)

昨夜、自分は確かに夜叉に食い殺されかけた。最初の一撃で骨を痛めた感覚があったし、内臓に達した傷もあったと記憶している。

しかし看護師が包帯を替えてくれた時、検分した傷は思った以上に浅かった。中には既に塞がっているものさえあった。どう考えても回復が早過ぎるのだ。

訝りながら思い返していると、行き着くのはやはり三匹目の夜叉のことだ。

あれは、果たして本当に夜叉だったのだろうか。

もちろん、姿形は間違いなく夜叉だった。だが人の言葉を操って、二匹目の夜叉——伊吹に対して説得のようなものを試みる理性と知能があった。

それだけではない。防戦しながら見せた苦悩の表情や、涙が交じった悲痛な叫び。あんな、死者への悔恨と哀悼を表す夜叉など見たことが無い。自分達が討伐してきたバケモノとは違う、まるで人間のような感情をあの日叉はもっていた。

(.....それに、あれは)

敢えて思い出さないようにしていた光景——口づけの感触が唇に甦り、真紘の頬にカツと朱が差す。

(何なんだ、あれはっ！)

たかだか犬に口の中を舐められた程度のことだ。初心な生娘ならいざ知らず、何を恥に思うかといえは——そんな口づけに感じてしまった、己のふしだらさにだ。

真紘は女を知らない。ましてや男など言うまでも無い。同年代の男より性欲は薄い方だろうし、何より、桂城の名に恥じぬよう品行方正・無欲であれと己を律している。

けれども、感じた刺激が何かわからないほど無垢でもない。瀕死の状態であったにも関わらず、背筋を這い上がったのは間違いなく性的な興奮だった。

闇に滲む朧月を背に、紅玉のような瞳で見下ろしてくる白い獣。血の海に沈む自分を抱きかかえた腕の逞しさ、頬に吹きかかった熱い吐息、そして囁いた低い男の声。

『.....感じるか？ おまえの中に、『俺』が流れ込んでいくのを』

唾液を絡めて口づけした唇の、押し入ってきた肉厚の舌の、柔らかさと濡れた感触。

ゆっくり深められていく口づけを受けながら、確かに体が温まっていくのを感じた。失血と共に体温まで失われていた体に、不思議と熱と力が戻った。それどころか、何度も与えられる口内への愛撫に、味わったことの無い快感を——。

「違うっ！」

思わず声に出してしまい、羞恥心がなお一層燃え上がる。

枕に顔を突っ伏し、頑是無い子供のように唸った。

(.....だが、あの時だ)

傷が回復したとしたら、あの時を措いて他にない。

(しかし、どうやって.....?)

寝乱れた髪をかき上げながら仰向けに姿勢を直す。

再び悩みの渦に巻き込まれそうになった真紘は、困惑に顔を顰めた。

——その答えは、意外なところからやってきた。

不意に、空気が動いた気がした。

気がした、ではない。鼻先を確かに微風がくすぐった。

全身に緊張が走る。視線だけ動かして、右手の先、閉めてあるはずの窓へと視線を転じる。腰の高さから天井近くまで届く大きな窓は、案の定、観音開きに開け放たれていた。

そして、影があった。

皓々と輝く月明かりが、棧に足を掛けた男の影を床に長く伸ばしている。

男は室内を見回し、こちらの視線に気づくと一瞬驚き動きを止めた。しかしすぐさま口角を吊り上げて不敵な笑みをつくると、部屋の中へと飛び降りた。

「眠らずに待っててくれるなんて、存外歓迎されてるじゃねえか」

男が言い終わるより先に、布団を投げ飛ばし跳ね起きる。

武装のまま病院に担ぎ込まれたのが幸いした。念のためにと枕元に置いておいた刀を抜き放つと、ベッドを蹴って一直線、人語を操るあの夜叉目がけて宙を跳んだ。

「何しやがる！」

振り下ろした刃を動物的な素早さで避け、すかさず真紘の後ろに回り込んだ夜叉が人の言葉で吠えた。

振り向きざまに薙ぎ払った第二撃も、寸でのところでかわされる。

「夜叉は斬る！」

「即答の意味が全くわからねえ！」

人間の、それも下町の若い男のような粗雑な物言いだ。

真紘はますます頭に血が上り、常になく悪態を吐いた。

「夜叉の分際で人間を真似るとは、この畜生が！」

続けざまに斬撃を放つ。背を反らして避けた夜叉は体勢が崩れたのを逆に利用し、下段の回し蹴りで脚を狙ってきた。

「くっ！」

直撃は避けたもののたたらを踏む。が、後ろにはベッド。うわっ、と布団の上へ仰向けに倒れたところに、夜叉がすかさず覆い被さってきた。

「捕まえた、ってな！」

腹に一発、拳が埋まる。

「っ……！」

呼吸が止まった際に手首に手刀を叩き込まれ、取り落とした刀を夜叉は部屋の隅へと蹴り飛ばした。

「ギラギラ敵意剥き出しにしゃがって。女みてえなツラのくせに、鬼っ子かよ」

ベッドに押し倒された格好から抜け出そうと暴れるが、両手を頭上でひとまとめにされ、体重を掛けられては動けない。体格差と包帯を巻いた腕の痛みもあって、抵抗の術を封じられてしまう。

「く、そっ……！」

「なあ、話聞いてくれよ。正面から訪ねてこなくて悪かったけどさ、こっちにも事情があるんだ。もう殴ったりしねえから、なあって」

鼻先が触れるほど、夜叉が顔を近づけてくる。

夜叉と戦うことには慣れているが、これほどの至近距離にまで迫られたのは初めてだ。感じてしまった恐怖を跳ね返そうと、睨みつける視線を余計にきつくする。

「ふざけるなっ！ 夜叉と交わす言葉など無いっ！」

噛みつく勢いの自分に、夜叉はやれやれといった風情で重いため息を漏らした。

「夜叉討伐隊、だっけか？ じいさんが言ってた通り物騒な連中だ。長らく穏健だったのに、最近じゃまた、俺の同胞を害獣みたいに狩ってるそうじゃねえか」

「人を食い殺す貴様らが、害獣以外の何だというんだ！」

「……それは、狂った奴らだ」

すぐ目の前にある紅い眼が、突然スッと細められる。

輝石のようなその双眸は、先刻までの不敵さが嘘のように真剣そのものだった。凄みすら感じる視線で鋭く睨みつけられ、気炎を吐いていた真紘の口が思わず怯む。

「自分自身を亡くしちまった……もう、どうにもしてやれない奴らなんだよ。おまえらが殺してる、『夜叉』は」

腕を押さえつける手の力が、少し緩んだような気がした。

しかしその隙をついて逃げ出すことが出来なかった。苦々しく視線を逸らした夜叉の横顔に、昨夜と同じ、哀しみを見出してしまったからだ。

人を食うバケモノに、人のような感情があるはずは無い。なのに、目の前の夜叉はその前提を打ち崩す。交わす言葉など無いと吐き捨てたのに、実際、言葉で意思の疎通が出来てしまっている。

——一体、こいつは何者なんだ？

浮かんだ純粋な疑問が、いつの間にか、真紘から氣勢を削ぎ落としていた。

「……貴様、私を殺しに来たのか？」

探る慎重さを、彼も感じたのだろう。見定めるように一度目を合わせ、先程まで放っていた殺気が薄れているのを見て取っただけ。

「違う、どうしても尋ねたいことがあって来た。こんな方法で忍び込んで、すまなかった」

申し掛かったままだが、頭を垂れたのは礼を失したことを詫げる動作だ。

人間と変わらない。夜叉なのに、人間にしか見えない。

真紘は大きく息を吐く。納得出来ないままでは斬り捨てることも出来ないと、真実への探求心が警戒心

に勝った。

「……手短に話せ。聞き終わったら斬る」

「ははっ、おっかねえ」

態度を変えたことで夜叉はあっさりと手を離し、上体を起こした。下半身を跨いだままなのは、また暴れても制するつもりだからだろう。不用意なのか慎重なのか、それとも自身の力に自信があつてのことか。

「俺は朱月。夜叉を束ねる家の者だ。若頭目って、同胞からは呼ばれてる」

「家……？」

夜叉が人間の家系のような話をしている不自然さに、真紘は首を傾げる。

朱月と名乗ったその夜叉は、気にせず先を続けた。

「おまえ、隊長らしいな。昨夜おまえを助けに来た仲間がそう呼んでるのを聞いた。……率直に訊くぜ。俺の同胞がどこにいるか知らないか？」

「……は？」

「数年前からだ。この帝都で、同胞が何人も行方知れずになってる。夜叉の中にはまだ人間に交じって暮らしてる奴もいるし、集落を出て都会で働こうって変わり種もいる。で、そいつらの何人かと、連絡が取れなくなってるんだ」

真紘は目を白黒させる。

朱月の話していることの意味が、全くわからない。

「俺は、そいつらを捜すために故郷から出てきた。夜叉を追ってるっていうおまえらなら、何か少しでもいい、情報を知らないか？」

「……まるで、夜叉が人間のような生活を営んでいるかの言い草だな」

「そりゃそうだろ、夜叉だって普通に生きてるんだから」

「貴様らの普通は人間を死体に変えることだろうが！」

「馬鹿言うな！ そりゃ夜叉にとって人間の精気ってのはこの上ないぞ馳走だ。けどな、もし貰うにしても同意の上でとか、相手の体力考えてとか、争い起こさないように気ィ遣ってんだよこっちだつて！」

朱月が語気を荒げて喚いているが、最早耳を素通りだ。

少し聞いてやる気になったが、あまりにもでたらめが過ぎて耳を貸せない。だいたい、夜叉と話をしていること自体がおかしい。

「貴様、本当に夜叉なのか？」

「おうよ！ 純粋生粋最高の血筋の、夜叉の若頭目様だ！」

「よろしい。討伐を開始する」

「わ、こら！ 刀取りに行こうとするな！」

油断を突いて抜け出そうとしたのを、寸でのところで捕まえられる。

揉み合った拳げ句にまた押し倒され、先刻と同じようにまとめた手をベッドに押しつけられたが、今度は足で腹を蹴ってやった。ぐっ、と苦悶の表情を浮かべた朱月が、天井に向かって吠えた。

「あーもう、あつたまきた！ 何だよこの気の短過ぎる馬鹿は！」

「ば、馬鹿とは何だ貴様！ 私は由緒正しい桂城家の次男、桂城真紘だ！ 貴様ごとき畜生に罵られる覚えは無いつ！」

「あ、そう。真紘ね、ま・ひ・ろ！ おまえが命の恩人を無下に出来るクソ野郎だってことは、よーっくわかった。……行き掛けの駄賃だ。昨夜の精気、返してもらおうぜ」

「精気とはな……」

何だ、と問いかけた言葉は朱月に呑み込まれた。

——口を塞がれた。彼の、唇で。

「んっ……んっ！」

暴れても、今度はビクともしない。

唾液を纏った舌先が歯列の間から侵入してくる。嚙んでやろうと気色ばんだ途端、狙い定めたように脇腹を撫でられた。ビクンッと反応してしまった隙に口づけは深まり、口内を舌でまさぐられると急に目眩がした。

（何、だ……これは……）

昨夜の状況に酷似していて、しかしまるで逆だった。

唾液を啜られるにつれて、体からどんどん抗う力が抜けていってしまう。呼吸を奪われているせいだけではない。背中に根が生えたように体が重く、氷を当てられたように冷えていく。もがいていた手も足も、最早指先ですら動かさない。

なのに、ぐったりとした体は同時に別の感覚をも享受していた。どこか甘いような空恐ろしいような、昨夜口づけられた時にも感じたあの官能的な刺激を、味わってしまっている。

「……ふうん。昨夜も思ったけど、イイ顔するじゃねえか。存外、慣れてる口か？」

一度唇を離れた彼が、ぬらりとぬめった口周りを、見せつけるように舐め取った。

言葉と仕草で躰られた恥辱に、猛烈な怒りが込み上げる。

「な、慣れてるって、このっ……！」

食ってかかる怒声が、鋭い悲鳴に取って代わられた。

襟をはだけるように、分厚い掌浴衣の中に忍び込んできた。脇腹をゆっくりと撫でる硬い皮膚の感触。まさぐられる体をぞくぞくと這い上がってくる波のような刺激に、全身が攣りそうなほど強張る。

「うっ……！」

足の爪先まで震えさせる、これは決して快感などではない。しかし苦痛でもない。

例えるならば痺れのようなむず痒さ。ぴりぴりと皮膚の下を這い、体の奥の柔らかな芯を苛めてくる未知の感覚に攫われ、溺れてしまいそうだ。

「慣れてるわけじゃねえのにその反応……そそるなあ、おまえ」

顔を近づけた彼が、笑い交じりの声を耳朶に注いだ。

掌は焦らすようにゆっくりと帯を解き、浴衣の前を開く。下衣も容易く外されて、衣は最早素肌の上で

波打つだけの飾りとなった。腕を拘束され、脚を膝で押さえつけられた格好で、裸を晒す羞恥に全身が燃え上がる。

「傷も全然残ってなくて、よかったじゃねえか。俺のおかげだな。ん？」

緊張に硬くした体を、覆い被さる男の視線がねっとりと這い回る。

「誰の……っ！」

いつの間にか尖りきっていた胸の飾りを、彼が唇で食んだ。

「ふっ！ ……うっ……」

舌先で転がされると、震えがくるほどの快感に襲われ愕然とした。こんな小さな、普段意識したこともないような部位で、顔が赤くなるほど感じてしまう。歯を食いしばって声が漏れるのを我慢しても、眦に涙が浮かぶのは止められない。

「おいおい、これだけで腰砕けじゃねえか。……言い返すことも出来ないって？」

彼が鼻で嘲笑った通りだった。自身でさえ知らなかった悦楽の火が、あろうことが辱めに煽られて勢いを増し、正気を焼いていく。右の乳首ばかり責められているせいで、左が物足りず、切なくなってしまうほどだ。

「……ん、なの」

「アン？」

「こんなの……私じゃ、ない……っ！」

精一杯の抵抗で叫んだ自分に、彼が声を立てて笑った。

「精気を返してもらっただけのつもりだったのに……その気になりそうだ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>